カ障連「わ」会報

http://challenged-catholic.net/ No.104 2025.4.● 発行

二〇二五年四月●日発行（毎週火曜日）AJU増刊●●●●●号 昭和五十四年八月一日 低料第三種郵便物承認 定価一〇〇円

目次

巻頭言「名古屋大会に向けて」…… カ障連 会長 江戸 徹 1
感謝のみなもと …… カトリック吃音グループ「ノトケー会」 佐藤 了 2
長崎大会に参加して …… 長府教会 桂 輝子 3
カ障連長崎大会の感想 …… 長府教会 江後紀久子 4
カトリック障害者全国大会へ参加して …… 岩国教会 マリア・ミカエラ 兼増 俊子 5
長崎大会 …… 宇部教会 中野 初美 5
長崎大会 …… 長府教会 江後 久子 6
カ障連全国大会in長崎「ともに……つんのうで！」に参加して …… 長府教会 川谷すず子 7
長崎大会 分科会報告 …… 長崎出身、現・広島教区在住 長府教会 渡邉 淡路 8
カ障連長崎大会に参加して …… 長府教会 下地 由美 8
カトリックの普遍性について …… 岩国教会 フランシスコ・サベリオ 松田 俊昭 9
長崎大会、お礼のメール …… 宇部教会・カ障連事務局 荻野 文子 9
『ハンチバック』から考えるバリアフリー …… 宇部在住 岡本 正彰 10
研修セミナーに参加してその１ …… 小池 政男 11

巻頭言

名古屋大会に向けて

カ障連 会長 江戸 徹

主の平安

日頃より日本カトリック障害者連絡協議会（以下、カ障連という）の活動にご理解とご支援をいただき、こころより感謝申し上げます。

第15回日本カトリック障害者連絡協議会名古屋大会が2026年11月14日～15日に開催されます。現在、名古屋教区では大会実行委員会を結成し準備が進んでいます。

この大会は、創立以来掲げてまいりましたように、全国の仲間がそれぞれに抱えている苦しみを、集いを通して分かち合い、一人ひとりが社会の中で自分らしく生き生きとした生活ができるよう霊的に支え合っていけるよう、教会と社会に働きかける使命を共有することを、この大会の目的としています。

また、大会開催を機に開催教区の障害のある信徒が集まり、新たな加盟団体が立ち上って全教区に加盟団体が存在することを望んでいます。

2023年10月、九州地方では初めて長崎大司教区において大会が盛会のうちに

開催されましたが、その後、大会実行に関わった皆さんが2026年４月に新たな加盟団体として活動が始まると報告をいただき大変嬉しく感動しています。

長崎大会に参加していた視覚障害の当事者は「今回初めて参加したが、いろんな障害当事者と分かち合い情報交換ができて本当によかった、これから教区に戻り共に歩む教会づくりを進めていきたい」と力強く話されていたことを記憶しています。

障害があっても地域で自分らしく生活することができるよう障害者自らが活動することによって差別や偏見のない誰もが受け入れられる教会に変えていかなければなりません。

2024年４月１日から「障害者差別解消法」が改正され、行政だけでなく民間事業所においても合理的配慮を提供することを義務としました。教会も民間事業所と分類されていますので合理的配慮の提供をしないことは差別にあたると定義されます。

教会においては、教皇フランシスコが「誰ひとり排除しない、誰ひとり取り残さない教会を目指す」と話されたようにインクルーシブで共に歩む教会であって欲しいと全国の障害当事者信徒は願っています。

次回の名古屋大会では「ミサへの完全参加と平等」の実現とインクルーシブな教会に向けての講演や分科会などで学び、なかなか集うことができない仲間と分かち合い、絆を深めていければと思います。

また、参加したいと思っていても病気や何らかの事情で参加できなかった皆さんとともにつながりを持って仲間の輪が広がっていくことを願っています。

この全国大会開催が今後の教会にとってもより良きものになりますようご支援ご協力を重ねてお願いいたします。

感謝のみなもと

カトリック吃音グループ「ノトケー会」

佐藤　了

「全くわたしは口が重く、舌も重い者なのです。（出エジプト４・10）

「[…]思い上がることのないようにと、私の身に一つのとげが与えられました。」（二コリント12・７）

昨年10月、東京カトリック障がい者連絡協議会の交流会での私の演題は、「モーセのしるし、パウロのとげ」。４年ほど前には、カトリック新聞に「吃音で召命を生きる」という記事を書いてもらった。おととし、大阪でのカトリック吃音グループの集いでは、「吃音説教師の問わず語り」。私自身の中心的経験として伝えたいことはいつも同じ――吃音なくして信仰なし。

物心つく前からプロテスタントの母にくっついて教会に行っていたことが、自分の信仰の原初のきっかけだったとは言え、ただそれだけでは、私はカトリック司祭にまではなっていなかった、それどころか、キリスト者として人生を歩むこともなかったろう。この不思議なハンディキャップなくしては。言葉をスムーズに発せられない吃音という障害。科学的にいまだ原因も対処法も解明されず、一般世間で無知と偏見に苦しめられ続けている吃音者たち。日常のあらゆる場面での実際の不便さもさることながら、さらにつらいのはその困難さが非吃音者からまったく理解されず、侮蔑されるという孤独。

しかし、その孤独の痛みこそが、キリストが私に担うよう命じた「自分の十字架」であった。その痛みこそが、神を呼び求め、イエ

スとともにいることを感じ、そして何より、他の人とふれ合うことへの導きにほかならなかった。真に孤独を味わう者同士こそが、神と人とのまことの出会いへと開かれることができるという神秘。

キリストの教会のために働きたいと、あえて私が選んだドミニコ会の正式名称は「説教者修道会」。なぜ、そんな大胆な決断を？――「吃音なのに。」いや、「吃音だからこそ」、自分の口でキリストを伝えたいという思いが強くされていたのだ。さらに、「吃音のおかげで」、あえて福音を説く務めを果たす喜びがより大きい。信仰によって吃音障害がなくなれば、それは奇跡かも知れない。が、吃音者のまま、司祭としてミサで説教していることのほうが、私にはもっと奇跡的に思える。神からいただいた自由によって挑戦できることへの感謝、それこそ私が生きて体験している福音。

言葉がなめらかに発せられるときもあれば、かなりつっかえるときもある。毎日ミサを捧げるのに緊張しながら、それができることのさいわいはすべてを上回る。いつも謙虚に、そして小手先でなく全力で、召し出しを生き、務めに忠実であるよう、まさに吃音障害は、私にとっての「モーセのしるし、パウロのとげ」。イエスとともに、神のうちに、兄弟姉妹のために、よりいっそう感謝に満たされることを目指して。

第14回日本カトリック障害者連絡協議会長崎大会に参加して

長府教会　桂　輝子

コロナ禍で延期になっていたカ障連長崎大会に、長府教会から江後会長他６名「ともにつんのうで」参加いたしました。

会場の恵みの丘純心大学キャンパスにバスで到着するとシスター方、高校、大学の学生さん他ボランティアの方々に迎えられ、マリアホール（体育館）に案内していただきました。

会場は熱気に溢れてとても賑やかでした。

開会の挨拶は前田万葉枢機卿お得意の『「つんのうで」ロザリオ月のカ障連』の句から始まり、大会のテーマ「つんのうで」が長崎から全国に全世界に実現しますように祈りますとお話しになりました。

つづいて、日本カトリック障害者連絡協議会の江戸徹会長は「ともにつんのうで」をテーマにインクルーシブな教会、誰一人取り残さない、誰も排除しない教会を実現するには何が必要かを考える大会にしたいと、ご挨拶の中でお話しになりました。

基調講演「インクルーシブ防災」と題して東俊裕氏がお話しになりました。

誰ひとり取り残さない社会をテーマに、熊本地震の際の被災地障害者センターの経験等お話しになりました。

分科会は12の分かち合いが行われました。私は７、「良いサマリア人の心を共に考える」グループに参加しました。ファシリテーターは恵みの丘近くの三ツ山教会の神父様でした。

各々の障害で困った事、辛い思いをした事、温かい心に触れた事等、障害をお持ちの３人方々と共に考えました。神父様は一人一人の考え、意見を丁寧に聴いて下さり、助言をして下さいました。

苦しみ耐えて祈り慰められることに気づきました。

懇親会では長崎名物のちゃんぽん、皿うどん、揚げかまぼこ、８月の聖母の被昇天の楽

しみふくれ饅頭等、沢山のご馳走がいっぱいでした。

時間が遅くなったこともあって、ゆっくり懇談する時間がなくて落ち着きませんでしたが、準備して下さった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

大会２日目　10月15日

マリアホール（体育館）で大会参加者の意見や質問、体験等が発表されました。江後会長がバリアフリーについて話されました。まず声をあげることが大切だと思いました。

感謝のミサ

中村倫明大司教の司式で行われました。

私たちの連帯「つんのうで」がより強いものとなり、一人も取り残されることのない社会を築く原動力となりますように。

対話と共生の精神によって弱い立場にいる人々が守られますように。

弱い者をこそ友としなさいと、命じられた主よ、この大会を祝福して下さい。私たち利己的な感情から釈放され、すべての人と友となることが出来ますように。アーメン

次回は名古屋です。皆様方多くの方々が「ともにつんのうで」参加できますように。

最後になりましたが、長崎事務局の濱口様には途中のバスの中から連絡したり、到着してからも大変お世話になりました。

ありがとうございました。

（88才もうすぐ89才老婆）

力障連長崎大会の感想

長府教会　江後紀久子

下関から車で約３時間、曲がりくねった山道を上がった会場で、私達は多くのボランティアの皆様に出迎えられました。

開会式の前、視覚障害者に向けて、会場となる体育館の様子を知らせるアナウンスが始まりました。体育館はどのような形状で、幅や奥行はどのくらい、入口はどの辺りで、椅子は縦横に何列配置されていて、壇上の横断幕に書かれた文字、立派に飾られた花の種類は何かなど、目を閉じていてもイメージが湧く説明が続きました。視覚障害者に必要なことに気づかされる時間でした。

基調講演では「個別避難計画等の準備」「要配慮者利用施設での対策」「在宅支援の対応」等、様々な説明がありました。一方、いざ災害が発生すると「計画・訓練していても、実際にはその通りには行動できず被災に繋がる現実」も知りました。

そのような時に大切なのは「障害者本人が積極的に声を上げる必要がある」こと。印象的だったのは、避難時に「見える人、見える人、誰か助けて下さい！」等、大きな声で周囲に伝えるのが、とても有効だということです。予期せぬ災害、経験のない事態に慌て恐怖を感じるのは、障害の有無に関わりがありません。コミュニケーションが出来る術、ソフト面の備えも大切なのだと再認識しました。

私が選んだ分科会テーマは「教会が障害者とかかわっていくには、どうすればいいだろう」でした。当日の意見交換が活発になるようにと、宿題で「参加者の小教区、近隣教区のバリアフリー度（スロープや障害者トイレの有無等）を調べておくこと」が求められていました。私としては、30年くらい前の古い感覚の内容だと残念で、大会に期待が持てないまま参加することとなりました。

ところが、結果公表で広島教区は概ね達成していて安堵したものの、力障連大会の経験のない教区は低めといった印象は否めず、長年の意識の積み上げが大切だったのだと感

じました。このような実態も踏まえつつ「知らない人が教会を訪ねてきたら」「障害のある人への声掛けは」「障害だけでなく、多様な人々を受入れる際の気持ちや振る舞い」など、経験に基づく多くの発言がありました。

私自身は障害を持つ者として、支援を待つだけではなく、何が必要なのか、何を求めているのかを「伝える使命がある」と考えています。

教会の人達（健常な人達）は、無視や傍観しているわけではなく、どう関わったら良いかわからない、どのように声掛けして良いかわからない。遠慮と配慮の結果、あるべきコミュニケーションに繋がらず、次のステップに踏み出せないのが課題なのだと考えています。これは、カ障連山口でも分かち合ってみたいテーマです。

分科会の結びでは「カ障連の取組みが豊かな共同体を育む」という言葉に感銘を受け、また、教会という場に留まらず「出向いて行く教会」「人を探しに出る教会」「聖霊に動かされる教会」であることが大切といったメッセージがあり、とても勇気づけられました。

コロナの影響で延期が続き、翻弄されながらも、このような大会を実現して下さった長崎教区の皆様に心から感謝しています。

カトリック障害者全国大会へ参加して

岩国教会
マリア・ミカエラ　兼増　俊子

主日のミサに、時間が合えば松田さんを誘って教会に行っています。

この度の全国大会は長崎だ、と分かって、私にも何かお手伝いが出来ないか、と参加させていただきました。

松田さんはコロナ禍で外出が出来ないなか、歩くことが少し不自由になられ、車椅子で一緒に行くことにいたしました。

テーマは「ともに…つんのうで」長崎弁で一緒に行こうです。

基調講演は、本大会の主要課題～誰ひとり取り残さない社会～「インクルーシブ防災」。

災害時における障害者支援の問題点を弁護士で元熊本学園大学教授の東俊裕先生がお話しされました。

災害にあえば自分の事で精一杯になります。お元気で避難所に来られる方は大丈夫ですが、先生のお話のように、避難所に自力で来られない方の為に、心配りをする事が大切だということが、分かりました。

いろいろな障害を持っておられる方が、たくさん参加されておられ、たくさんのお声を聴くことが出来ました。皆さん明るくイキイキとしておられ、見習う点がたくさんありました。

分科会は時間が足りなくて、五島の仲知教会の神父様のある日の一日を動画で見せていただきました。お忙しく働いておられる様子がよく分かりました。

今回長崎大会に参加させてもらい、徳山の宮﨑さん、宇部の中野さん・荻野さんと神学生の小丹枝さん、お世話様になりました。

このような機会を与えて下さった神様に感謝いたします。

長崎大会

宇部教会　中野　初美

10月14日朝、新山口駅で荻野さんと７時25分発の「こだま」の７号車に乗り、松田

俊昭さん、宮﨑玲子さん、兼増俊子さんの姿を見た時、やっとこの大会に無事出席できるとホッとしました。

岩国、徳山、宇部、目のお悪い松田さんとの連絡、切符の手配など、電話の故障もあって、宮﨑さん、荻野さんのご苦労は大変なものでした。ヘルパーさんの助けと途中から、岩国教会の兼増さんが参加希望され、新岩国からの松田さんの介助を申し出て下さり、本当に嬉しく、安心しました。また細江教会におられるイエズス会神学生の小丹枝さんが、ホテルでは松田さんと一緒の部屋に泊ってくださることになり一安心でした。

混雑する長崎駅のホームで、白杖に気がついた宮﨑さんが声を掛けた青年は、何と、夏に宇部教会を訪問された横浜教区の清水さんでした。清水さんとは翌日、大浦天主堂にも一緒に行き最後長崎駅でお別れしました。

会場の純心大学は山の頂上。沢山のボランティアの温かいお迎えと共に、２日間は盛り沢山のプログラム。お天気も良く、実りあるものでした。

中でも基調講演の後の分科会、私は第二分科会「『誰ひとり取り残さない』社会を実現するためには」に参加。10人くらいの女性と、ひとりの車椅子の青年、その両側にそれぞれ介助の男性、そしてその横に車椅子の青年のお母さん。

車椅子の青年は心身ともに重い障害がありながら、お母さんの「障害があっても、一人暮らしがしたいだろうから、24時間の内、23時間の訪問看護の体制で、一人暮らしをさせています」との発言に本当にビックリ。『誰ひとり取り残さない』のテーマに合ったお話に深く感動しました。

２日間の大会の締めくくりは「感謝ミサ」。司式の司教様が閉祭の歌を手話と共によく響くバスで歌われたこと。シノドスよりこの大会を優先して出席してくださった前田万葉枢機卿のお姿。とても行き届いた長崎教区の信者のみなさん、シスター、学生さんたちの本当に心温まるおもてなし。

心を残しながら、小丹枝さん、清水さんと私たち５人はタクシーで大浦天主堂へ。これは松田さんのご希望で、それまでずっと車椅子だった松田さんが大浦天主堂のとても急な長い階段をご自分で、歩いて上り下りされ、天主堂内では静かに長い間祈っておられました。

私は３年前は「長崎大会に行ったら、絶対に五島へ行きたい」と思っていましたが、この３年間、膝を急に悪くしたり、とても年老いた事を自覚、大会に参加するのがやっとでした。

３年先、名古屋大会に参加できるのか？なるべく元気にいけることを祈るこの頃です。

ながさきたいかい
長崎大会

長府教会　**江後　久子**

会場の長崎純心大学は山の中で遠いと話に聞いていた。私たちの車は長崎街道につづく緑深い山坂をジェットコースターのように走り続けた。

そんな中いきなり長崎湾を希む山の頂上に純心大学に出くわして歓声をあげた。

空、海、森の中、会場の大学は輝いてみえた。

「つんのうで　ロザリオの月　カ障連」と詠まれて、５年ぶり第14回日本カ障連全国大会が開催された。

前田万葉枢機卿、日本カ障連江戸徹会長、紙崎神父他の挨拶、そして東俊裕先生による「インクルーシブ防災」をテーマに基調講演

があった。
　その後３時から分科会に分かれた。私こと以前不安で悩んでいる隣人を受け入れなかったいきさつがあり⑦「良いサマリア人の心を共に考える」を選んだ。教室に20名程度（その中に司祭３名、シスター１名）。
　先ず、ファシリテーターより聖書朗読（ルカ§10　25～37）があり、すぐ分かち合いに入った。怪我をして倒れている人を見て通り過ぎた司祭、レビ人の行いを庇う意見が早々に出て分かち合いが始まった。
　庇うことにすぐ反論された。イエスは「あなたも行って同じようにしなさい」と言っているではないのか！と。
　言いわけでなく、自分の状況の壁を壊せ、一人一人の人間の内側にある壁を乗り越えよ！と息を飲むような反論に私自身の反省を込めて、ゆるしを願う気持ちだった。
　視覚障害、精神的に痛みのある方、車椅子の方、隣人愛は偽善ではないかと壁を感じる方等々、一同真剣に声をあげて、喜びも苦しみも分かち合った。瞬く間に時間が過ぎ終わった。
　翌日は全体会、各グループの意見を出しながらも自由な発表交換が行われ、画一的でないことが面白かった。
　その後中村倫明長崎司教、前田万葉枢機卿、英隆一郎神父他十数名の司祭団による感謝ミサに与り幸せだった。
　カ障連ではいつも沢山の力をもらい、教えられて帰途につく。
　次回は名古屋教区へとバトンタッチされた。
　また是非参加したいと身の程知らずに約束した。
　長崎カ障連全国大会実行委員会の皆様、そして山口のカ障連事務局の皆様、お世話になり、ほんとうにありがとうございました。
感謝のうちに。

カ障連全国大会 in 長崎「ともに……つんのうで！」に参加して

長府教会　川谷すず子

　何よりも、カ障連大会が初めて長崎で開催されたことに、喜びまた新しい福音の風が吹いていることに、神様と皆様に感謝しています。
　レポートを書くに当たり、長崎の実行委員会の方々が作成された刷紙を隅々まで読みました。
　分科会では「ともに喜び、わかちあう」（第６グループ）に参加しました。
　主に植松教会の方々が作成及びファシリテーターとして進行、まとめていただき感謝でいっぱいです。障害を持っている人もいない人も一堂に集まり祈り、分かち合えたことは素晴らしいお恵みだったことでしょう。
　今、私は健康の恵みに与っていますが、死の淵を少し体験させていただいた事は何にも替え難い貴重な体験でした。
　前田万葉枢機卿様はじめ参加者の方々も何らかの障害にあった事が有るでしょう。分科会⑥では偶然遠方から出席されているのに、平戸出身でしかもいろいろな繋がりがありびっくりする事多々ありました。ある司祭がおっしゃっていました。偶然でなく、摂理ですと。
　私は健康をいただき、また生かされている事に感謝して、何かをしようとする時は、カ障連長崎大会での、皆が力強く「ともに……つんのうで」の喜びのひと時を土台として、次回の名古屋大会にも行きたいと思う。王で

あるキリストの大祝日に合わせ、喜びの福音を告げ知らせる人として成長・行動して行きたい。長崎大会で、準備、進行、ボランティアで、温かく招いていただいた皆様に感謝でいっぱいです。

すみません。読み返しましたら、私的な感想ばかり。難しいことはわかりませんが、いかに自身が無知か、マイノリティの言葉もよく使われていますが、充分に理解していませんでした。

只、福音の喜びを共に喜び分かち合い、論争しないで、全てを平和な心で送ることができますように、祈りの大切さ、手話の大切さと美しさが目の前に浮かんできます。

一緒に歩むその輪が広がっていけばきっと光り輝く!!

「ありがとうございました。」

長崎大会　分科会報告

長崎出身、現・広島教区在住

長府教会　**渡邉　淡路**

基調講演の後、分科会がありました。

分科会は「オリーブの会」に参加。「オリーブの会のみなさんのお話を伺ってまわりにいる友達をよりわかって、これから共にやっていこうと思ってここに来ました。」と自己紹介しました。

現在、世の中がますます複雑化し、生きづらさを抱え、心の不調に苦しんでいる方が増えていて、４人に１人が生涯を通じて心の病になるといわれているそうです。誰もがこの病気になりえます。

各地区からの出席者は、幸いにも友や知人の伴走者がおられ、悩みを聴いてもらえ、失敗があっても立ち上がる切っ掛けをつかんで、大好きな物、興味のあるものをお持ちの方が多く、少なくとも前向きに歩んでおられる様子です。

中でも年配の男性の体験談は心に響き共感しました。

20歳の神学生の時発症し、10年間入院、その後結婚され、農業をし、お孫さんもおられる方で、長年薬もやめておられる方でした。

私も体調を崩して２か月間リハビリの為、入院して、二度と復調しないのではないかと不安な日々を送りました。お見舞いの方々、家族に支えられ、懸命に励み元気になりました。

神父様が「病は恵みですよ」と言われました。病を知って気づきました。友達の悩みを心から聴いてあげていたか？心細い気持ちに寄り添ってあげていたか？と自分を反省しました。

これから、神様に助けていただきながら、心を広くして新しい気持ちで共に歩みたいとおもいます。

力障連長崎大会に参加して

長府教会　**下地　由美**

初めて全国大会に参加しました。

主人が脳出血によって障害者になりましたが、たくさんの方々に支えられ生活してきました。

その経験から、「誰もが助け合い支え合う社会」はどうすれば実現するのか……？と考えてきました。

純心大学での講演会、長崎教区の方々のボランティア、純心大学生のボランティア、各地から参加された人々、健常者も障害者も互いに気づかっている様子は、まさに天の

国そのもので、信仰によって一つになって、感動しました。

今、私が考えていることは、教会で、特に、ミサにおいて、一人一人がみことばと聖体をどのようにすれば深く味わえるのか？ということです。

全国大会に参加した者が、小教区に持ち戻り、分かち合うことがミッションだと思います。

カトリックの普遍性について

岩国教会

フランシスコ・サベリオ　**松田　俊昭**

かつてNHKテレビで、カトリックのアナウンサー黒田あゆみ（渡邊あゆみ）が言っていたようですが、私はこの度３年おきに開かれている、カ障連全国大会で長崎に行き、大浦天主堂に行って、そのことを痛感した。

この天主堂は、ユネスコの世界遺産に認められているが、48段の階段を登って上にあがってみても、ただこの場所の由来がスピーカーから聞こえてくるだけで、詳しい事は分からなかった。しかしその時、私がつくづく思ったことは、カトリックの普遍性ということだ。2000年変わらず続く信仰の普遍性。

明治になって日本へ黒船の汽船がやってきて、250年近くの鎖国の眠りから目覚めたようで、この天主堂近くに住んでいた農民の何人かが、250年過ぎたら信仰の自由がやってくるということをキリシタンの先祖から聞いてきただけに、プチジャン神父に色々聞いてみて確かに日本も自由な信仰生活が出来るようになったのだと喜び勇んでいたに違いない。ほんとにたいしたことをした人たちだと思えてならない。

日本のキリシタンは凄い人たちだと感心している。

大浦天主堂を訪ねてその思いを深めた。

それにしても近年、日本の宣教はあまり、進んでいない。

長崎大会、お礼のメール

宇部教会・カ障連事務局　**荻野　文子**

長崎大会では、カ障連（山口）は実行委員会の皆様に本当にいろいろお世話になりました。

申し込み締め切り後に、松田さんが車椅子利用になったことと付き添ってくださる兼増さんの追加申し込み、新幹線と高速バス利用者が、長崎駅から会場までの送迎バスに間に合わないことなどなど、困ったメールにいつも優しく対応していただきました。大会から帰った翌日、送迎担当の責任者をされていた濱口さんにお礼のメールを出しました。以下にそのメールと頂いた返信メールを紹介します。

濱口様

この度はなんとお礼申し上げたら良いか、本当にありがとうございました。

遅れて到着しました私たちの為に温かいご配慮で接していただき感謝の言葉もありません。

松田さんには車いす対応の車で送迎いただき、とても助かりました。

また帰りの時間も勝手をいたしましたのに、ご心配下さり何度もお声を掛けていただき、安心してご聖体拝領までおらせていただくことが出来ました。

お陰様で松田さん念願の大浦天主堂にお参

りして、帰ることが出来ました。
大会実行委員会の皆様、送迎をして下さった皆様、たくさんのボランティアの皆様にくれぐれもよろしく。カ障連（山口）一同感謝に堪えません。

念願の大浦天主堂に行かれて良かったですね。遠路はるばる来られて体調崩されませんでしたか？本当にお疲れさまでした。あの後、次会開催地名古屋への引き継ぎ式があり、村上さんはじめ張り切っておられました。みんなでお弁当を食べた後帰路に疲れた様子でした。

こちらのスタッフ一同にもお礼の返信があった事を伝えておきます。皆様との出会えたことを神に感謝します。広島教区の神父さまにはナガミチと津和野巡礼で服部神父さまや肥塚神父さま、野中神父さま、などお世話になりました。もう少し時間に余裕がありましたらそのような話もしたかったのですが残念です。これからもカ障連山口の皆様が充実した日々を過ごされますようお祈り致します。

濱口
以上長崎大会報告

『ハンチバック』から考える バリアフリー

宇部在住　**岡本　正彰**

「私の身体は、生き抜いた時間の証として破壊されていく」、「本を読むたび背骨は曲がり肺を潰し喉に孔を穿ち歩いては頭をぶつけ、私の身体は生きるために壊れてきた。」
圧倒的迫力で選考会に衝撃を与えた、第128回文學界新人賞と第129回芥川賞受賞作である『ハンチバック』の一節である。

著者の市川沙央さんは10代で先天性ミオパチーと診断され、14歳から仰向けになる時は人工呼吸器が必要な重度障害者である。
『ハンチバック』の主人公釈華は市川さんと同じ障害で、ブログ記事を書くことを仕事にしながら、親が残してくれたグループホームで生活している。
釈華は、「紙の本を憎んでいた。目が見えること、本が持てること、ページがめくれること、読書姿勢が保てること、書店へ自由に買いに行けること、５つの健常性を満たすことを要求する読書文化のマチズモ（優位性）を憎んでいた」
この一節には、紙の本を持って読むことが難しい障害者がいることを知ることができてよかった、など好意的な感想がある一方、釈華は傲慢であるというバッシング的な感想も多いそうである。
私は生まれつきの脳性麻痺アテトーゼ型で手足と言語に障害があり、紙の本は読むことは出来るが、図書館や友人に借りた本は破らないよう、傷つけないよう注意するため、不随意運動が増し、読みにくいことがある。
市川さんの幼少の頃も紙の本しかなくて、紙の本が読めるよう訓練や努力することを強いられ、それが出来なければ読書から疎外されてきたことを想像すると、釈華に「紙の本を憎む」とまで言わせた思いは理解できるし、賛否両論あることが議論を生み、読書バリアフリーが進むきっかけになると思う。
私が感じる不便は、市役所でサービスを申請したり、止めるときにも書類に手書きをしなければならないことが多いことだ。
私は日常生活で自分にわかるメモぐらいは手書きすることもあるが、市役所で書類に手書きすることは、サインでも無理である。
必要不可欠な手書きまで無くせとは言わな

い。自筆することが難しい障害が代筆をお願いしたら、気軽に、快く応じてほしい。

最近は宇部線も無人駅がほとんどで、宇部駅、宇部新川駅でも駅員が不在の時間帯が多い。そのため切符を買う場合は自動販売機を使うことになるが、私は投入口に硬貨や紙幣を入れることが難しいので、一人で出かけたときは誰かにお願いして買ってもらう。

車椅子利用の障害者や視覚障害者が無人駅から列車に乗る際、数日前からＪＲに連絡し、駅員を派遣してもらわなければならない。急用の場合は列車を利用できず、不便である。

これを「障害者はわがままだ」、「利用客が少ない駅の無人化は、経済効率上もっともなことだ」と言い片付けるのなら、バリアフリーは進まない。

バリアフリーを進める鍵は、一人一人の気持ちの中にある。『ハンチバック』を読んで、そう感じた。

2024年度 研修セミナーについて

能登半島地震の報告

事務局長　**小池　政男**

日時　2024年９月28日

開催場所　大阪・高松教区司教館

講演者

講演者１　名古屋教区司祭・カリタスのとサポートセンター長　片岡義博神父

講演者２　きょうされん「能登半島地震」災害対策本部・事務局長　大野健志（紙面の都合上大野氏の講演内容は次回号に掲載させて頂きます）

片岡神父講演内容

１　自己紹介

名古屋教区野村司教様による2015年叙階。

２　被災状況

能登半島地震及び津波により死亡者363名（直接死230名・関連死133名）（さらに遺族からの申請の関連死者さらに200名報告あり）

家屋の倒壊３万２千棟、２ヶ月で全体の１割しか解体が進んでいない。

また先日（９/21）豪雨きましたが、その状況の中で本日は講演のためにこちらに来ました。

３　活動状況

１／１　地震が発生した後に、現地に向かいましたが、道路が崩壊して通行不可。

１／２　七尾教会に行き、その惨状を司教様に報告致しました。輪島のこども園の園長さんから電話報告を受けました。

１／３　カリタスジャパン他とオンライン会議

１／７　カリタスジャパン現地入り。支援物資を持参すると共に輪島教会、幼稚園等大きく崩壊していた。

１／８　金沢でサポートセンター設立

１／９　支援物資等持参訪問。涙を流して喜んで頂き、このまま孤立させるわけにはいかないと司教様と相談する。そして出来ることからやっていくことになった。

現在９ヶ月経過しているが日本人の信徒の把握は、輪島教会３名、七尾20名、羽昨５世帯。

多国籍の人は輪島のフィリッピン、七尾と羽昨のフィリッピンとベトナム人、残念ながら障害者は把握することは出来ませんでし

た。

４　個人としての対応

私は今回の災害が発生した対応として、全くどうしてよいか分かりませんでした。

普段各教会にミサには行っていたが、その信徒の人々とコミュニケーションが取れていなかったので安否の確認等を含めてどうしたら良いか分かりませんでした。

支援としてはお金だけではなく、人的支援が必要だと感じました。

最初は被災された人たちに対して何かすることがありますか？と聞いても、大丈夫ですと答えが返って来ていました。しかし段々と交流が深まって来ると信頼されたのか色々と困っていることを話して頂くことが出来ました。

話を聞くのはシスターたちが聞き上手で色々な情報を得て対応をすることが出来ました。

普段からのコミュニケーションを交わしていくことで有事に対して適切な支援をすることが出来るので、如何に大切であるかを感じました。

「平時に出来ないことは、有事には出来ない」という教訓を得た。

個々に支援することよりも、関係者や関係組織との協力体制の調整が大変でした。

５　具体的な支援内容

・給水所まで行けない人も多くいることが分かり飲料水を配布。
・飲み水よりも一般の生活用水の確保が大変でしたので、軽トラックにタンクを積んで各家庭に配達しました。
・暖かい食べ物を配布。
・今は富山教会や金沢教会でカフェーを開くことが出来て30～40人参加してくれてます。
・ゴミの回収。
・輪島教会には最初は行けませんでしたが、今は２回／週　支援物資を配達出来ている。
・祈りの集いを１回／月行っている。
・仮設住宅でサロンを開催している。
・幼稚園支援は名古屋の南山高校の生徒が支援してくれました。
・広島学園高校の生徒さんたちは、輪島幼稚園で草刈りの支援してくれました。
・８月末に輪島教会の解体が始まりました。そして新しい教会建設計画が行われている。
・今後は心のケアをして行きたいと思っている。
・七尾市の災害ボランティアセンター支援に20以上のグループの支援をしてくれている。
・名古屋教区の支援体制の運営委員会が10月スタートする。
・今回の豪雨災害で街中に土砂が流れ込み床上浸水があり片付け支援を行っている。
・今も断水が続いている。給水支援を続けている。

連絡先及びご入会の申し込み先

事務局：〒466-0037　名古屋市昭和区恵方町2-15
名古屋教区カリタス福祉委員会室内
日本カトリック障害者連絡協議会
Tel：052-852-1426　Fax：052-852-1422
郵便局振替口座番号：００１００－７－３１２５４
（同封の振込用紙をご利用ください）
会　費：年間１口　1,000円
（団体　10口以上　個人　１口以上）
加入者名：日本カトリック障害者連絡協議会

二〇二五年四月●日発行（毎週火曜日）ＡＪＵ増刷●●●●●号　発行所　東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸の内三―六―四三　みこころセンター四Ｆ　低料第三種郵便物承認　定価一〇〇円